

加納岩白桃(かのういわはくとう)

登録番号：第364号

育成者：平塚八郎

登録年月日：昭和58年2月24日

来歴：「浅間白桃」の枝変り

登録者：加納岩農業協同組合（山梨
県山梨市上神内川189）

特性

■栽培特性

樹勢・樹姿および樹の大きさなどは中程度であり、葉芽や花芽の着生も良好で複芽が多いから、栽植距離や整枝せん定など、樹の取扱いはほぼ白鳳並みでよい。

開花期は甲府盆地で4月上旬、白鳳とほぼ同時期である。

花粉は親の「浅間白桃」と違って多いので、人工受粉の必要はない。生理的落果も少ないので、結実率は白鳳並みかそれ以上に高い。したがって果実の肥大を助けるために、摘蕾・摘花の実施が望ましい。

本品種の最大の問題点は、無袋栽培をした場合に裂果が発生する点で、親の「浅間白桃」ほど甚だしくはないが、安定した生産を図るためには袋掛けが欠かせない。

果皮の着色は中程度であるから、良好な着色をさせるためには、密植はもちろん、樹が徒長的な生育をしないよう、肥培管理やせん定に留意するとともに、除袋後の着色管理も必要である。なお除袋時期はその後の天候にもよるが、収穫始めの1週間前頃である。

■果実特性

果形は円～扁円形で、果頂部は浅く窪み、梗あはやや深い。果実の大きさは中の大で平均250gくらいになり、玉揃いはよい。

果皮の地色は白で、陽光面を中心に赤く着色する。果肉は白で果肉内の着色は少なく、核周囲の着色はない。

肉質は溶質で密、繊維はやや少なく柔軟多汁である。食味は良好であり、甘味は多く、条件がよければ13～14度になる。酸味は少なく、渋味・苦味とにもない。品質は同時期の白鳳系の品種に勝るとも劣らない。

果実の日持ちは中くらいである。

核は粘核で核割れは少ない方である。

成熟日数は満開後91～100日の範囲にあり、甲府盆地で7月上～中旬、白鳳より数日早く、「倉方早生」と「白鳳」の間に収穫される。

■病虫害抵抗性

他品種と比較して特に抵抗性に差のある病虫害は認められないが、成熟期が梅雨期に当たるので、灰星病その他果実腐敗病に対する防除は徹底しなければならない。

せん孔細菌病に対する抵抗性は「白鳳」よりやや強いようであるが、まだはっきりしていない。

■地域適応性

土壌その他に対する適応性は比較的広いが、しいて挙げると重粘な土壌では、無袋栽培の場合裂果がやや多いように思われる。

平成3年度の山梨県における栽培面積は未成園が多いが、推定で60ha生産量約700t程度で、モモ全体の栽培面積が伸び悩む中で、「倉方早生」等に代わる高品質早生種として、増加傾向にある。

(山田喜和)